



令和2年11月12日(木)



新型コロナウイルスとの戦い ～歴史から学ぼう～

わかつが祭も終了し、今週から通常通り授業が行われています。

最近、新聞を賑わせているのは新型コロナウイルスの新規感染者数です。兵庫県でも増加傾向にあり、油断できない状況が続いています。学校では、マスク着用やソーシャルディスタンス等の三密回避は当たり前前の光景になっています。窮屈だったマスク着用なども日常の一部になってきましたが、やはり大事なことはウイルスの存在をしっかりと意識することかと思えます。慣れの中で忘れてしまわないことです。

今からちょうど100年ほど前、スペイン風邪といった新型インフルエンザが猛威をふるったことがありました。日本は大正時代で第一次世界大戦の終結期です。当時はウイルスといった概念もあまりなく、現在のような医療体勢も整っていない時期で、感染に対する危機意識も低かったようです。私が学生の頃、祖母からこのスペイン風邪についての話を何度も聞かされたことを思い出します。このスペイン風邪、改めて調べてみると、様々なことが見えてきます。そして、私なりに、この過去の歴史から、現在の新型コロナウイルス終息へのロードマップを考えてみました。

スペイン風邪は第一波、第二波、第三波と大きく三つの波に分けられています。第一波は1918年の春先から、初夏まで、第二波は1918年の冬、第三波は1919年の冬から1920年の春先までになっています。第一波では、被害は少なく死者もほとんど出ていません。ところが第二波では多くの死者が出ています。第三波は第二波よりも死者数は少ないものの致死率が非常に高くなっています。第二波、第三波はそもそも冬であり、「温暖・湿潤」な春先よりも「寒冷・乾燥」かつ密閉空間の多い冬の方がウイルスの感染確率が高まったと思えます。またウイルスが時間経過とともに変異して強毒化したのでしょうか。これを現在の新型コロナウイルスに当てはめてみると、第二波が始まろうとしている兆しを感じられます。私たちの感覚では、新型コロナウイルスに感染しても、若者はほとんどが無症状、あるいは軽症といった軽い考えがあります。ただし、これは第一波の感覚であって第二波も同じとは言えません。これからウイルスが活躍できる「寒冷・乾燥」な気候で感染拡大し、ウイルスの強毒化となれば、無症状や軽症では済まされない状況が生まれる可能性を無視できません。スペイン風邪では、ウイルスの概念が当時はあまりなかったにせよ、第一波を軽視したことが第二波の大きな被害を生んだといってもいいと思えます。

新型コロナウイルスでは、第一波でも無症状、軽症者が多かったとはいえ大きな被害が出ています。目前に迫っている第二波という大きな波に私たちはどのような対策をとればいいのでしょうか。過去の歴史は変えられませんが、見直すことができると思えます。100年前のパンデミックを知ることも私たちには大切なことだと思い、長々となりましたが書かせていただきました。